

# 研究目的ならびに成果と課題をめぐって

佐竹 昭\*

## 研究の目的

厳島神社を中心とした宗教的世界、参拝客・観光客を迎えながら培ってきた住民の暮らし、歴史的に形成されてきた景観などを見直し、そのなかに「厳島」とは何かをさぐりたい。それは今後に守り伝えるべき「厳島」の本質は何かという問いでもある。

厳島をめぐる従来の研究には『厳島の自然』(1975年、宮島町)と『厳島民俗資料緊急調査報告書』(1972年、広島県教育委員会)のそれぞれ行き届いた報告書が刊行されており、『広島県史』では厳島神社関係文書が資料編に紹介されるとともに神社の歴史も詳しく述べられた。その後も地元で『あき 宮島の自然と文化』(1979年創刊、宮島町博物館協会)、『宮島の歴史と民俗』(1983年創刊、宮島町立宮島歴史民俗資料館・宮島町史編纂室)などを中心にさまざまな視角からの研究が紹介され、宮島町史の刊行(現在事業は中断)や『宮島の自然地形・地質編』(宮島町教育委員会、1994年)など、宮島町を中心に研究成果の刊行が続いている。しかし、一般のイメージからすればややもすると平安末期の神社を中心とした芸術や建築、歴史研究に偏ることが多かったのではなかろうか。

本研究ではむしろ直接現代に関わる視点を重視し、地質・植生から町民の暮らしや観光業に及ぶ多様な視角から「厳島」の特質を追求すること、それをもって先の課題に近づこうとするものである。これには文理の枠を越えた共同研究の可能性を模索したいという思いもこめられている。

## 研究の分担

氏名	役割分担(計画当初のもの)
於保 幸正	厳島の地形形成
海掘 正博	厳島の土砂災害
小野寺真一	厳島の土壌・河川特性
中越 信和	厳島の植生
朝倉 尚	厳島の文芸
樫原 修	厳島のイメージ
高谷 紀夫	祭祀空間としての厳島
佐竹 昭	近世の厳島の社会・経済
布川 弘	近代の厳島の社会・経済
フंक・カロリン	厳島の世界遺産戦略
浅野 敏久	世界遺産の島の現状と問題

## 研究の成果と課題

それぞれの成果は本号の各論考をご参照していただくとして、ここでは「厳島」を複数の視角からとらえようとする本研究の意図、そこからどのような見通しが得られるかについて簡略ながら報告させていただく。

### 1. 宮島町の現状から

他の瀬戸内島嶼部同様に現在では人口の減少と高齢化が進んでいる。しかし対岸から宮島町への通勤が多く必ずしも他地域の過疎化とは同じではない。住宅地が狭い上、文化財保護との関連等で様々な規制があつて新築が難しいなどの側面があり、また食料品から日常生活用品にいたるまで多くを島外に依存せざるをえない条件などからやむをえず島外に住居を移すという

\*広島大学・総合科学部広域文化研究講座

事情があるからである。しかし働き手が島外に流出する人口二千二百人の町で、年間三百万～二百万の観光客に備えた施設を維持するのは町行政にとって大変な重荷であり、最近の競艇収入の激減が町財政悪化に拍車をかけている。

にもかかわらず、宮島町在住で後掲浅野氏のアンケートに答えられた町民は、上記のような不便や問題点をふまえた上でなお、例えば文化財を守るための規制は必要で住民の責務とさえ考えている。これはタテマエではなく、文化財や島の雰囲気を守られてこそお客さんが来られ、それで島の生活が成り立っているという暮らしに根ざした考え方である。観光に生きることでは筋金入りなのである。

## 2. 「厳島」のアイデンティティをめぐって

観光に代表されるように、守るべきものは頑固に守りながら、一方で周囲の人々が厳島に何を期待しているのかを素早くキャッチし自己変革を遂げていく生き方、それがこの島の暮らしの一貫した特徴のように思われる。

改めてその歴史を振り返ってみる。厳島では神様に遠慮して開発が行われなかったとも言われるが、むしろ近隣の大黒神島と同様に、元来地質・地形的に耕地の確保が非常に困難な島ではなかったか。瀬戸内の他の島々とのきちんとした対比作業が必要である。そのなかで、厳島神社は砂防上からも島内ではここしかないという場所に立地している。平安時代以降水運の発達にともない港町として発展するが、神社の誘致成功によって祭礼に人々が集まって交易が展開し、また神主家は荘園領主としてさらには戦国大名として成長していく。この島そのものが生み出す富ではなく、いわば交通上の位置を利用し、あるいは宗教的・政治的シンボルの役目を果たしているのである。

江戸時代には領主としての性格を失うとともに、地乗り航路の衰退で船が寄らなくなるなど新たな生き方が求められる。そこで広島城下との役割分担で遊郭や芝居小屋の集まる歓楽街を形成する。それでも宮島は生活に苦しみ年六回の富くじ

収入が頼りであった。また島の山林は藩の管理下にあったが、一定の規制下で伐採が続けられ林業は島の重要な産業となった。島はほとんど赤松林でおおわれ、伐採だけでなく火災被害も多かった。一方、江戸時代後期からの寺社参詣ブームに対応して名所・旧跡作りも進み、「厳島八景」の選定など文化的事業も行われ、土産物も工夫されて観光地としての性格が確立する。

明治期になると山林は国有化され、神社の存在が改めて強調され、神の島としてさまざまなタブーに服したことや、耕地の開墾がほとんど行われなかったことで「原始林」のイメージが拡大してゆく。近代的な公園としての整備が熱心に進められ、鉄道の開通とあいまって観光客を引きつける。その魅力作りの例として戦後間もなくの紅葉谷の庭園砂防にその精神を見ることができる。一石たりとも島外のものを用いなかった砂防工事はそのものが一個の文化財としての価値を有するようにさえ思われる。

現在では、神社を中心とした文化財の保存・活用はもちろんだが、今後は山の自然と景観の保全・活用が重要とするアンケート結果が出ている。自然との共生は世界文化遺産指定の趣旨でもあるが、この新しい傾向を島民はすでに本能的に察知している。実際、島の植生は大きく変化しつつあり、その保護区の設定との齟齬もみられ早急な対策が必要である。

世界遺産として守り伝えるべきは、自然や神社をはじめとする文化財はもちろんながら、実はこのような島の人々の頑固でいてなおかつ厳島に望まれているものを敏感に察知する柔軟な生き方そのもののようにも思える。島それだけが生み出す富はきわめて僅かである。しかし交通上の位置を利用し、宗教的・政治的な仕掛けを試み、観光客を集めるなどマイナスをプラスに転化する生き方は多かれ少なかれ瀬戸内海の島々に共通した生き方である。その一つの典型として厳島をとらえることも可能ではなからうか。